
EAAFPの概要と 国内における取組について

令和7年 2月28日

環境省自然環境局
野生生物課



自己紹介： 酒井 郁 (さかい かおる)

2018年 環境省入省

2018年 9月 関東地方環境事務所 野生生物課 外来生物防除専門官
(小笠原諸島や関東地方における希少種保全・外来種対策等)

2021年 4月 信越自然環境事務所 野生生物課
鳥獣管理・感染症対策専門官/希少生物係長
(長野県・富山県における希少種保全・外来種対策・鳥獣保護管理等)

2022年 4月～ 自然環境局 野生生物課 湿地保全専門官
(ラムサール条約・渡り鳥等を担当)

視力が悪いので実は
鳥を見つけるのが得
意ではありません！

豪州の大学で学位(環境科学)を取得した後、現地の環境コンサルタント会社で野生生物の調査業務に従事していました！好きな動物は爬虫類です・・・



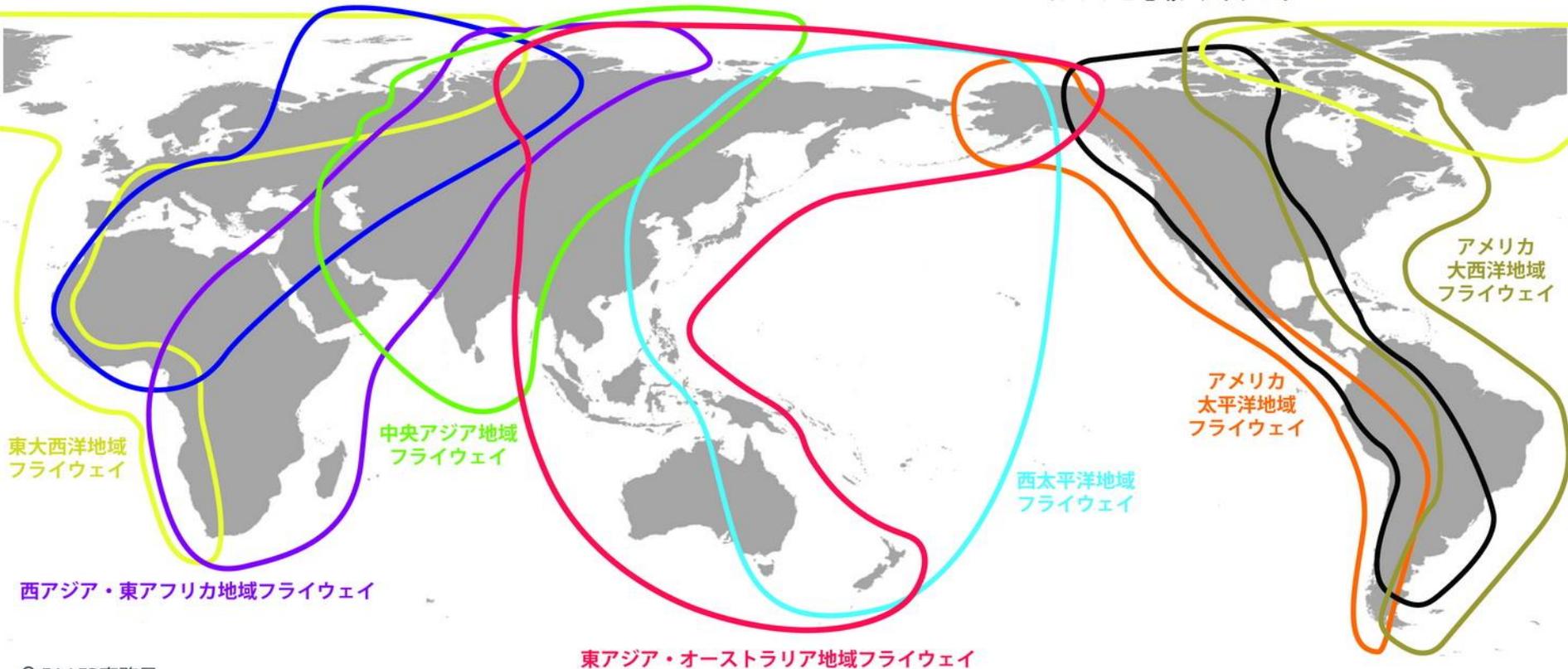
出張・会議が多く、**体調管理**が大切です！
【現職における海外出張の実績】
スイス x 5回
アメリカ・ハワイ
オーストラリア・ブリスベン
韓国・仁川 タイ・バンコク
この他に北海道、東北、九州地方など



9つの主要な渡りのフライウェイ

黒海・地中海地域フライウェイ

ミシシッピ地域フライウェイ



© EAAFP事務局

【東アジア・オーストラリア地域フライウェイ (EAAF) とは】 最大規模のフライウェイのひとつで、ロシア極東やアラスカから、東アジアと東南アジアを経て、オーストラリアやニュージーランドまで 22 カ国に及ぶ渡りのルート。210 種以上、5,000 万羽以上の渡り性水鳥が生息。

東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ(EAAFP)



- 目的**
- ・ 渡り性水鳥とその生息地の保全
 - ・ 関係する多様な主体による国際的な連携・協力の促進

- 発足経緯等**
- ・ 2006年、日豪政府の主導により発足
 - ・ 事務局は、韓国インチョン市に所在
 - ・ ラムサール条約の地域イニシアティブ

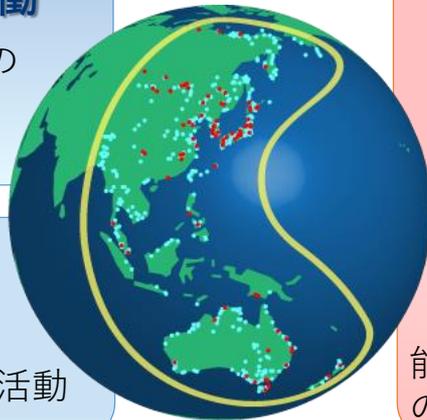
- 参加主体**
- 関係国政府 (18) 豪州、日本、米国、ロシア、韓国、インドネシア、シンガポール、フィリピン、カンボジア、中国、バングラデシュ、タイ、モンゴル、NZ、マレーシア、ミャンマー、ベトナム、北朝鮮
- 国際機関、NGO、民間企業等 (22) ラムサール条約、生物多様性条約、ボン条約、FAO、CAFF、ASEAN生物多様性センター、IUCN、WI、BLI、日本野鳥の会 等

全ての関係国・機関との協働

※二国間渡り鳥等保護条約・協定の相手国は米・露・豪・中・韓と限定的

フライウェイ規模の調査・保全活動

17の作業部会、特別委員会等が活動



生息地間のネットワーク強化

国内34か所が参加 (全体155か所)
ラムサール登録や姉妹湿地提携に貢献

生息地管理者の能力養成活動支援等

能力養成ワークショップ、科学的知見の提供・交換、普及啓発キャンペーン

➡ 効果的な渡り性水鳥の保全

➡ 関係者による自主的な取組促進

国内におけるネットワークの体制

EAAFP事務局（韓国・仁川）



環境省（政府パートナー）



ガンカモ類

国内コーディネーター

（中海水鳥国際交流基金財団 神谷 要）

専門家

シギ・チドリ類

国内コーディネーター

（バードリサーチ 守屋年史）

専門家

ツル類

国内コーディネーター

（日本ツル・コウノトリネットワーク

松本文雄）

専門家

ネットワーク参加地：21か所
（施設管理者、行政担当者、
NGO等）

ネットワーク参加地：12か所
（施設管理者、行政担当者、
NGO等）

ネットワーク参加地：7か所
（施設管理者、行政担当者、
NGO等）

種群ネットワークの活動

- ◆ ニュースレターの発行
- ◆ メーリングリスト等による情報共有
- ◆ コーディネーターによる情報収集等

「東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワーク」
国内コーディネーター通信
News Letter of Anatidae National Coordinator Japan

東アジア・オーストラリア地域
フライウェイ・パートナーシップ
The East Asian-Australasian
Flyway Partnership (EAAPP)

No.192
2020年
10月号

ガンカモ類国内コーディネーター
神谷 聖(公益財団法人中海水鳥国際交流基金財団)
〒683-0850 鳥取県三好市赤松町665
Tel 0839-24-6149 / Fax 0839-24-6140
E-mail: ane@anmedia.or.jp

●世界渡り鳥の日 2020 World Migratory Bird Day



渡り鳥の保護を訴える世界渡り鳥の日は、春と秋の二回あります。毎年6月と10月の第2土曜日となっており、今年は、2020年6月9日(土)と2020年10月10日(土)です。今年のテーマは、「Birds Connect Our World」(鳥が私たちの世界をつなぐ)です。渡り鳥の移動と、その生存に不可欠な生態系の保全の重要性を強調することを目的に選ばれました。WMBD 2020についてページが作成されています。各サイトでイベントをぜひ登録ください。

https://www.worldmigratorybirdday.org/

●「レッグフロッグ・チャレンジコンテスト」実施中

世界渡り鳥の日の企画として東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ国際事務局のホームページで、「フロッグチャレンジ・フォトコンテスト」を実施しています。

今年撮影されたフロッグもしくは、カラーマーキングされた首輪・足環を装着された鳥の写真を2020年11月15日までに送ってください。



詳しくは、

https://www.aunflyway.net/legchallenge_p
hoto_contest_2020/
まで

●西太平洋フライウェイにおけるコハクチョウへのカラーマーキングについて

ロシア科学アカデミー (Diana Solovyeva) と中国科学院生態環境科学研究所 (Cao Lei 教授) のグループは成鳥と幼鳥の白鳥の生存率を推定するために2016年から2020年にかけてチャレンジャー(ロシア)で234羽のコハクチョウに標識をつけています。2019年までに標識した181羽のうち81羽が日本で確認されました。今後首輪が外れていく可能性がありますが、寿命を調べる調査でするので足環などに注視して観察するよう、お願いいたします。

2020/10/11 No.191	「東アジア地域ガンカモ類重要生息地ネットワーク」 国内コーディネーター通信	1/2
----------------------	--	-----

JCSN ニュースレター
第39号
2022年9月
発行 日本ツル・コウノトリネットワーク

★昨年の越冬状況

○北海道のタンチョウ

北海道が行っているタンチョウ越冬分布調査が2022年1月25日に行われました。結果は総数1,489羽(成鳥1,359羽、幼鳥90羽、不明40羽)となり、過去最多の記録となりました。ただし、幼鳥90羽はかなり低い数字です(前年は141羽)。分布の割合としては大きな給餌場がある釧路管内の割合が減少し、他の管内で増加している傾向が見られました。幼鳥数の減少に関しては、春先の大雨による繁殖率の悪化の可能性が指摘されています。ただ、この調査は地域によって調査精度にも違いがあり、生息数のモニタリングとしてはいろいろと課題点もあります(数年前者「越冬分布調査」と名前も変わりました)。今後の調査のあり方についても専門家から意見がでていきます(以上、報道発表資料より <https://www.kushiro.pref.hokkaido.jp/is/ts/sisei/hodou0403.html>)

○出水のナベヅル・マナヅル

2021年10月18日にナベヅル17羽、マナヅル18羽が初渡来しました。鹿児島県ツル保護会による羽数調査は5回実施され(下記の表参照)、最終的な推定渡来数はナベヅル15,511羽(11/27)、マナヅル2,182羽(1/9)、クロヅル9羽、カナダヅル8羽、ソダヅル1羽、ハイブリッド1羽以上となりました。前年度に比べて、マナヅルが少し減りましたが(前年度は2,800羽)大きな変動はありませんでした。なお、ソダヅルは2羽飛来しましたが、11月に渡来した2羽目は同日に死亡しました。標識ツルはナベヅル12羽、マナヅル1羽を確認しています。こちらもマナヅルは昨年は7羽でしたので少なくなっています。

2021年度出水市ツル羽数調査結果(鹿児島県ツル保護会)

	ナベヅル	マナヅル	クロヅル	カナダヅル	ソダヅル	ハイブリッド	計
11月6日	7,768	88	5	3	1		7,865
11月27日	15,511	1,314	8	4	1	2	16,840
12月4日	15,145	1,546	8	4	1	2	16,706
12月18日	14,040	1,315	9	4	1	2	15,371
1月9日	12,469	2,182	9	8	1	2+	14,671

Aug. 2022
モニタリングサイト1000
シギ・チドリ類調査
ニュースレター

環境省自然環境局鳥獣多様性センター/NPO法人バードカーズ 2021年度 冬期概要

2021年度冬期の結果の概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2021年度冬期(2021年12月~2022年2月)の概要をお知らせします。

●個体数は前年より減少

2021年度冬期調査は、2021年12月1日から2022年2月28日までの期間に全国100か所のサイト(暫定値)で調査を実施しました(前年度冬期は104サイト)。

最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の集計は、シギ・チドリ類**43種40,865羽**。そのうち希少種では、ツクシガモ6,691羽、ヘラサギ92羽、クロワラヘラサギ540羽、ズグロカモ6,193羽が記録されました。**一斉調査**(2022年1月16日を基準日とした前後1週間内の調査)へは、85サイトが参加し(前年度冬期は83サイト)、シギ・チドリ類**37種17,893羽**が記録され、そのうち希少種では、ツクシガモ1,124羽、ヘラサギ31羽、クロワラヘラサギ174羽、ズグロカモ899羽が記録されました。

1999年度以降の冬期調査における「**全サイトの最大個体数合計(全サイト)**」と「**調査が継続されているサイトのみ最大個体数合計(継続サイト)**」の経年変化を図1に示しました。全サイトの最大個体数合計は、前年度冬期と比べ-15.1%減少し、継続サイト(35サイト)では前年度冬期と比べて-8.2%の減少でした。また、冬期調査では、ハマシギ(68.0%)、シロチドリ(7.7%)、ダイゼン(7.8%)、ムナヅル(4.2%)、ミヨシギ

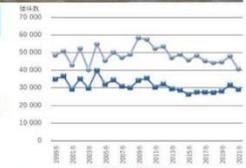


図1 冬期調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の経年変化(1999年から2021年の継続サイトは15)

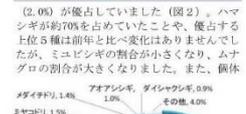


図2 2021年度冬期調査の種構成

国内の関連会合・イベント

■ EAAFP国内連絡会

- 各地における渡り性水鳥や生息地の保全状況等の共有、パートナー会議（MOP; EAAFPの総会にあたる会議）などの国際会議や今後の活動計画などに係る議論を年一回程度実施
- 2024年度は2月25日に開催し、11月にフィリピンで予定されるMOP12に向け我が国の取組状況等について情報共有と意見交換を実施

■ 渡り性水鳥フライウェイ全国大会【本日】

- **種群を超えたネットワーク参加地間の情報交換・交流の促進**を目的として、2021年度より開催
- ネットワーク参加地における保全活動の紹介、渡り鳥の保全に関連するテーマを設けて発表者を募り、情報共有を図っている
- 2024年度は2日間の日程で開催。**現地見学**も実施し、より一層の情報共有・交流促進を図る



普及啓発ツールの作成

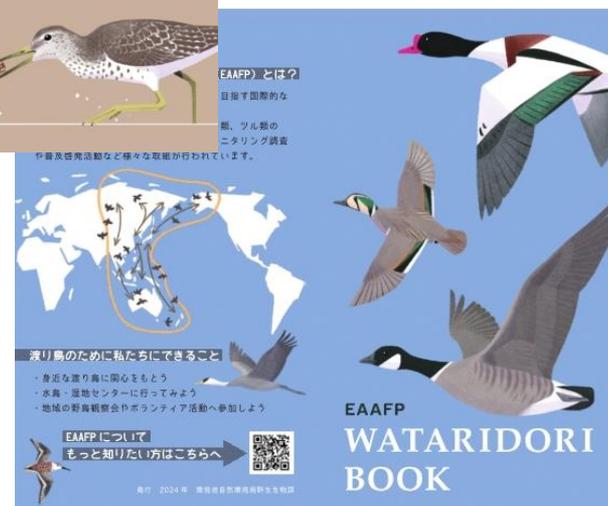
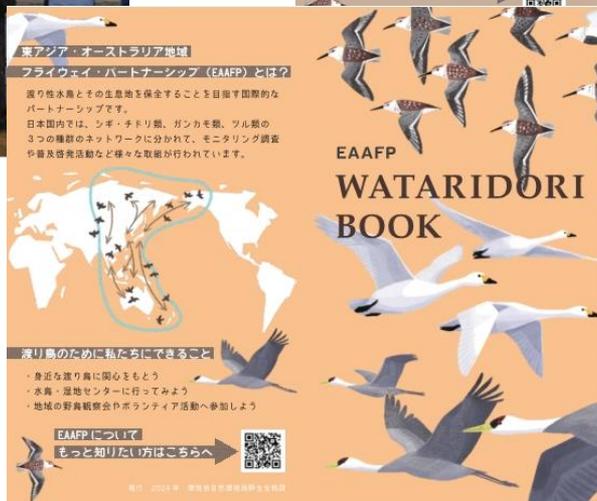


東アジア・オーストラリア地域 フライウェイ・パートナーシップ

East Asian - Australasian Flyway Partnership 2023

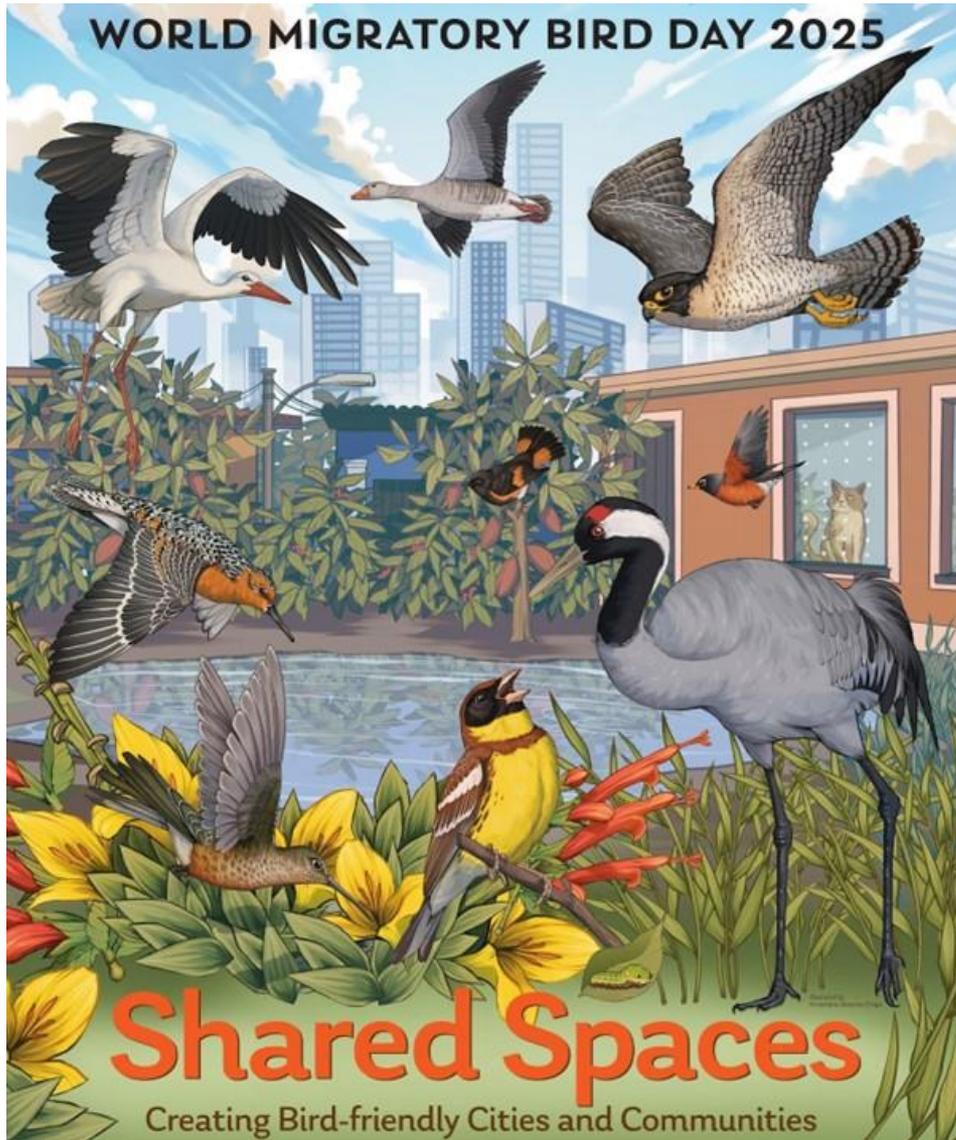
私たちは皆、東アジア・オーストラリア地域フライウェイの一員です！

(2023年作成 パンフレット)



(2025年作成中 野鳥観察ノート)

世界渡り鳥の日



- ◆ 国連では、5月と10月の第2土曜日を「世界渡り鳥の日」とし、毎年テーマを決定し渡り鳥保全の啓発に取り組んでいる
- ◆ 2025年のテーマは「共に生きる：鳥たちにもやさしい街と社会をつくろう」
- ◆ この日にあわせて世界各地でイベントが開催され、特設ホームページにイベント情報を登録できる

「世界渡り鳥の日」特設ページ
<https://www.worldmigratorybirdday.org/>

今年はEAAFPとラムサール条約ともに国際的な動きがある年



EAAFP MOP12

開催期間

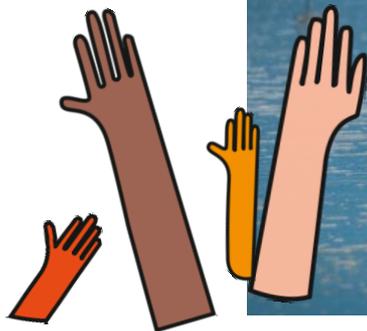
2025年11月8日（土）～14日（金）

開催場所

フィリピン

参加者

パートナー、専門家、NGO等

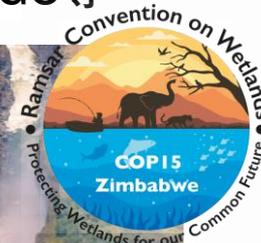
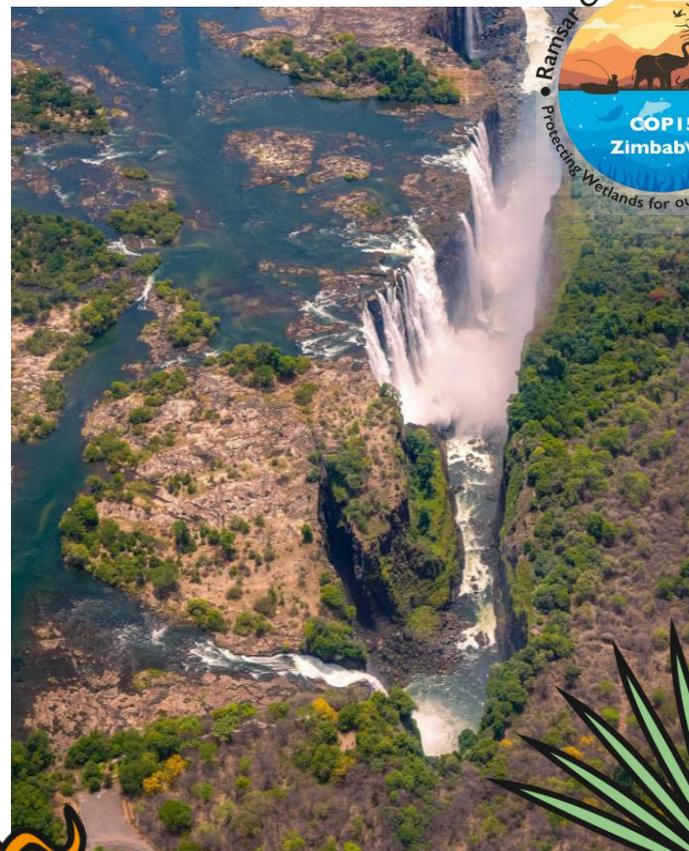


ラムサール条約COP15

2025年7月23日（水）～31日（木）

ジンバブエ共和国
ヴィクトリア・フォールズ

締約国、国際機関、NGO等



今後の方向性



■ 海外との姉妹湿地の締結による国際連携の強化

- 渡り性水鳥にとって、フライウェイとは、繁殖地から越冬地までの間を往復する旅路である
- 姉妹湿地プログラムを実施することにより、国内外の関係者による**情報交換、共同研究や環境教育を推進**するとともに、**湿地管理能力を高める機会を創出**することができる

■ 国内のラムサール条約関連会合との連携の強化

- 国内にある53か所のラムサール条約湿地のうち、**24か所がEAAFPネットワーク参加地に登録**されている
- 両者ともに**渡り性水鳥にとって重要な生息地**であることから、管理主体や方法は様々ではあるものの、**今後はさらに連携した取組が期待**される